集団の中で個性をどのように生かすか（一）

小松福三

はじめに

「集団づくり」ということがいわれる。あちこちの研究会で、この「集団づくり」というコトバを聞かないで帰ることは先ずない。「集団づくり」というコトバそのものを聞くことができないにしても、「集団指導」とか「集団管理」といったコトバや「集団のまとまりは……」とか「集団の中で……」といった話は必ず聞かされる。それほどに〝集団ばやり〟である。まことにけっこうなことのように思える。

しかし、〝まことにけっこう〟とよろこんでばかりいてはならない現実がそこにはあるようである。というのは、「わたしの園では集団主義の教育をしておりまして……」といわれるその先生が、じつは「集団主義教育」と「集団教育」ということのちがいをご存知なくて〝集団主義〟というコトバを乱発されているといった事実があるからである。あるいは、集団としてのまとまりをつくることと、管理しやすいクラスにすることとを同一視したり、〝従順で没我的態度こそ集団の成員としての資格〟とでもいいたげな考えを持っていらっしゃる先生が「集団づくり」というコトバを平気でつかわれている現実がそこにはあるからである。

いずれにしても「集団づくり」は、今日の課題である。その中でも特に、与えられたテーマである〝集団の中で個性をどのように生かすか〟ということは重要な課題である。

以下、稿を二、三回に分けてこのテーマについての私見を記すわけであるが、なかなかに荷が重く、十分なことが書けるかどうか、まったく自信がない。少なくとも、この課題にせまる一つの糸口、一つの視点をさぐる役割をはたすことができればと思って

稿をおこしたい。

〝いい子主義〟からの脱皮

これは、女教師特有の考えかどうかは責任を持っていえないが、一般に女教師の中には〝いい子主義的教育観〟があるようである。

わたしがいう〝いい子主義的教育観〟あるいは〝いい子主義的教育方法〟とは何か、ということをとりあえず説明しておく必要がある。具体的には次のようなことをさすのである。

幼稚園の教育現場では、「どこが静かになったかな……、静かにしているいい子たちから渡しますよ」といって画用紙を配る。あるいは、「あなたいい子でしょう。さあ、はやくお席につきましょう」といって座席につかせる。このようなことがよくある。つまり、おせじを言ったり、おだてたりして教師の思い通りに子どもをあやつっている現実がある。はみ出す子、いうことを聞かない子は、教師にとっては邪魔者となりがちな現実もあるのである。このようなことは、幼稚園や保育園だけにみられる特異な現象ではない。すでにそれ以前において、つまり家庭において、この〝いい子主義的教育〟がおこなわれているのである。たとえば「おりこうさんだから、そんなバッチィーことはやめましょう」「いい子ね、さあ、はやくあとかたづけをしましょう」「いい子でしょう。がまんするのよ」「いい子は、そんならんぼうなことばはつかわないのよ」といった具合に、注意したり何かに行動をうながす時の枕詞とし「いい子（ども）」を乱用しているようである。そうして、いつしか我が子を、お行儀よくて、おことばづかいがていねいで、わがままをせず従順で、ひかえめな、いわば没我的封建モラルの持ち主に仕立てていくのである。そのくせ、自分がそういう自主・自立性のない子どもにしてしまったことに気づかないまま、「個性豊かな子どもに育ててほしい」と教師に要求してくるのである。

子どもはもともと、わがままで、したがって伸び伸びとした自由さと、自発性や創造性の芽を持っているものである。それが、母親や教師のさまざまなおだてによる方向づけや禁止句的注意、制約によって、小さな型にはめこまれていくのである。つまり、〝いい子〟というセパレートラインを没我の姿勢で走るおもしろみのない子になっていくのである。

たとえば子どもの〝けんか〟でみてみよう。子どものけんかは、ほとんどささいなことが原因でおこる。少なくともおとなからみればその原因はささいでしかない。しかし、子どもにとってはそれが重要なことであることをわたしたちは理解していく必要がある。その子どもは、せいいっぱいの〝自己主張〟をそこでしているのである。ところが、「けんかはいけません」「いい子

はけんかはしないのです」という一般論で片付けてしまったり、いい子主義的モノサシで評価してしまう傾向がないとはいえないわたしたちの現状である。

以上のように、子どもたちのまわりは、いわゆる〝いい子主義〟でかためられているのである。したがって子どもたちは、幼児の段階から没我的パーソナリティーを持つ子どもとして成長していく傾向となるのである。つまり、個性味のない子どもに仕立てられていくのである。そこで、なにはともあれ、〝いい子主義的教育〟から、教師自身脱皮していく努力をしなければならないのではないだろうか。

〝封建思想に支えられる集団観〟からの脱皮

前項で記したように、わたしたち教師やおとなには、大なり小なり〝いい子主義的教育観〟があり、その教育観に立った教育方法を無意識に乱発している現実があるようである。この〝いい子主義〟の思想をもうすこし分析してみると、「集団と個」とのかかわり合いについての考え方を知ることもできるようである。

それはひじょうに極端ないい方をすれば、封建思想に支えられた論理である――といえるし、全体主義的論理であるともいえる。なぜならば、先にも多少記したように、〝いい子主義〟の具体的指針は、「我慢」「自己抑制」「謙譲」「憐憫（れんびん）」「主従」「上意下達」「服従」といった一連のコトバに代表されるような内容であるようである。つまり、「集団」を「全体」としてとらえた、いわば〝全体主義〟的考え方であり、したがってその場合の集団に対する個は「没我的個」として位置づかねばならないようである。

わたしは、多くの教師や母親が、意識的に全体主義立場をとっているとは思いたくない。むしろ、未整理な日常的生活感覚から無意識にとっている立場だと思いたい。わたしたち日本人は、あまりにも永い年月、封建社会と全体主義的社会に生きてこなければならなかった。そのような歴史の重みを背負っている。したがって日本人の生活感覚としては、この封建思想と全体主義的思想とが、岩にこびりついてはなれない苔（こけ）のようにまつわりついているのである。特に、「男尊女卑」の社会体制の中で育ってきた女性には、この思想が強いようである。幼稚園の教師とて、決して例外ではないのである。

このような教師は、口先では新しい集団像を論じることができたとしても、心底の生活感覚や意識まで近代化され、現代化されているとは決して断言できないのである。少なくともわたしには断言できない。むしろ、わたしが接したことのある幼稚園教師の多くは、古い封建社会の家族主義的考え方に支配されすぎているようである。

幼稚園の職員室をみるがよい。そこには、おとなばかりで構成された一つの古い家族がある。封建モラルに支えられた家族集団としか言えない教師たちがいる。園長を家長とすれば、その下に各自の能力や技量、そして特性などとはほとんど無関係に、先輩と後輩という、いってみれば長幼の序列によって枠ぎめされた姉妹たちがいる。この世界では、能力のある妹が、創造的な発想をもって何かをしようとすれば有形無形に保守的な姉たちの圧力が加えられる。もしそうではないとしても、「みんな仲良く、すべていっしょに――」といった消極的連帯感や「角を立てるようなことをさけ、すべて円満に――」といった、いってみれば「以和為尊」という論語的思想で集団の秩序が保たれようとしている。そこでは、各担任、各教師のオリジナルな実践やユニークな構想による保育プランの作成の保障はないのである。

「幼児の指導」という保育雑誌がある。この四月号に次のような現場教師の悩みの相談が掲載されていた。

「私は先生として四年目のものですが、私の園はクラス数も多いためか、統一をとるためにカリキュラムがしっかりできております。各学年ごとに毎週打ち合わせをし、次週にやるもののねらい、方法など、チーフを中心に決めていきます。ですから、どの組の進度もいつも同じようになっています。新任の先生にはたいへんやりやすいようで、とくにあせりを感じて苦労することもないようですが、何年かたってきますと、あまりに決められたことが多くて、自分のやってみたいことも時間がなくてできないという不満があるのです。もちろんその園にあれば、その方針にしたがうのは当然のことですが……そして各クラスがばらばらなことをしていたら進度も違い教育もかたよってくると思いますが、与えられたカリキュラムの中で独創性を生かすのにはどんなくふうをしたらよいのでしょう」

このような現実はまだいい方で、もっともっとひどい園が多いとみなければならない。

多少まわりみちにそれた感があるが、このような消極的連帯感や家族主義的円満主義によって支配されている教師には、弁証法的討論による発展は期待できない。それのみか、このような教師には、子どもたちの集団を高めていく真の論理は存在しないのではないだろうか。「出る釘は打たれる」という古いコトバが、集団の中で生きる処生訓として潜在し、子どもを評価し指導する場合の一つの有力なモノサシになっていることは疑う余地はないようである。したがってそのような教師には、個性的、創造的発想によって行動し前進していく子どもを育てることはできないのではないだろうか。

〝集団の中で個性をどのように生かすか〟は、子どもの教育の問題とする前に、教師自らの課題とすえていかなければならない。

そして、この課題解決の一つの道筋として、以上記したように教師自らの中にある〝封建思想に支えられた集団観〟からの脱皮をはたさなければならない。

わがままな自己主張の許容

教師自らが、教師集団＝職場集団の中で個性を生かした活動ができなければ、どんなテクニックを用いても、子どもを集団の中で個性豊かに育てることはできないであろう。しかし、このことだけに力点を置きすぎると、教育はすべて「教師論」で片付けられてしまう危険がある。そこで、「集団の中で個性をどのように生かすか」について、以下に具体的教育の手だてを中心に考えていくことにする。

結論からいえば、思いきりわがままな自己主張をさせてみよう、わがままを許していこう――ということである。

先にも記したように、入園してくる子どもたちは、その家庭にあって、いわば〝いい子主義〟の教育を受け、〝集団の中での没我は最高の態度〟といいうるようなセパレートされた考え方を身につけてきている。この現実を、何としても粉砕していかなければならないし、この考え方から解放してやらなければならない。そのためには、かなり思いきった手だてが必要である。

幼稚園にしろ、小学校にしろ、〝きまり〟〝やくそく〟というのがあって、子どもたちの集団の中での生活には規制が加えられている。そのこと自体、決して悪いことではないし、当然のことである。しかし、その〝きまり〟や〝やくそく〟が、あまりにも早期から、しかも無制限に数多く存在している。したがって子どもたちは、〝きまり〟や〝やくそく〟というオリの中できゅうくつに生活している。わたしは先ず、この〝きまり〟や〝やくそく〟という名のオリをとりのぞき、自由で気ままな世界に放してやるべきだと考える。

入園後二か月ぐらいたったころである。淳ちゃんは〝おあつまり〟になっても決して部屋にはいっていかなかった。そして、決まったように逆にホールの方へ飛んで行き、三輪車に乗って遊ぶのである。反逆児であり、わがままな行為であり、反集団的な行動である。しかし、淳ちゃんには一つの考えがあって、あえてこの反集団的な行動をおこしているのである。集団破壊を意図してのことではない。教師の度重なる注意に、彼は「だって、〝おあつまり〟になってからがホールであそぶのおもしろいんだもん。だって、誰もいないしさ、三輪車に乗ってもあぶなくないんだもん……」と、自分の勝手な行動の正当性（？）を説明した。彼は彼なりに一生懸命に現実の条件の中でより楽しく生きるくふうをしているのである。

たしかに淳ちゃんがいうとおり、みんながホールで遊んでいる

時は思うように三輪車を走らせることはできない。かりに走ることができたとしても相手にぶつかり、けがをさせたりすることも予測される。そこで淳ちゃんは、一計を案じたわけである。すばらしい着想である。この場合わたしは、なにがなんでもみんなといっしょに部屋に入れようとは思わない。とりあえずの間、そのわがままはゆるしてあげたい。

三郎君は音楽の時間に教師にくってかかった。というのは、先生が「〇〇ちゃん」と節をつけて呼ぶと「ハーアイ」と節をつけてこたえなければならないことになっていた。ところがこの三郎君は何度呼ばれても「ハイ」としかこたえられない。その段階までは音程が正しくとれなかったのかもしれない。あまりしつこくその先生が「サブローチャン」をくりかえすので、たまりかねた三郎君は「ぼくはさっきからおへんじしてるよッ」とくってかかったわけである。節をつけてこたえなければならない音楽活動が、三郎君にとってはどうしても理解できなかったのかもしれない。いずれにしてもわたしは、この三郎君の行為はすばらしいものであると思う。正しい音程で節をつけてへんじはしていないにしても、たしかに呼ばれたへんじはしているわけであるし、堂々と「ぼくはさっきからおへんじしてるよッ」と抗議をしたからである。正確な正当性はない、いってみればわがままな抵抗、抗議ではあるが、この心からの叫びは貴重であり、許容してやらなければならないと思う。

淳ちゃん、三郎君のような事例に出会わした場合、わたしたち教師の多くは、「おあつまりだから止めていらっしゃい」「ひとりだけわがままを言ってはいけません」とか、「『ハーァイ』というんです。あなたはそれができないのです。もういちど『ハーァイ』とおへんじしてごらん」と、なにがなんでも規定通りにやらせようとする。そして、その子の、いわば心からの叫び、心からの願いを理解しようとしない。わたしはこの二つの事例にみるようなわがままは歓迎し、とりあえず許容すべきだと考える。

わたしたちは急いで集団化を考えるきらいがある。集団化への規制をしてしまいがちである。集団化をするための規制は、没我を強いることにもつながる危険性があることを知らなければならない。たとえ集団としてのまとまりができなくても、真の自由の前提であるわがままを許容していかなければならないと考える。〝わがまま〟は、その子の真の叫びでもある。わがままを大いに出させ、そのわがままを自ら評価できる子に育てていくべきであると考える。

以上のように記すと「わがままは無法につながる」「わがままを許して、どうやって集団化ができるのか」という批判の声が聞こえてくるようである。この点については次号にゆずることにする。

（和光学園幼稚園）